



No. 137

ティーブレイク
Tea Break

～追憶のぬくもり～

6月にもなると、年度切替時の転勤や転属の挨拶回りも一段落し、職場は一時の落ち着きを取り戻すようになる。

そして、ちょっと前のお別れの挨拶や送出し行事を思い出してみると、そこには別離に伴う独特の風景と涙が見られる。

ただ不思議だったのは、保育園での風景。転勤の先生方は大泣き。園児たちは、不思議とカラッとしている。

転勤の先生方の心情は、本当によく理解できる。転勤は公務員の常、と頭では分かっていたとしても、心はそうは行かない。保育士というのは、たいていは4年周期で異動があるそうだが、幼児の4年というのは長い。

0歳児で、泣くこと以外に何もできなかった赤ん坊が、いつのまにか歩き出し、自分でトイレにも行き、4歳ともなれば多少生意気な言葉もしゃべるようになる。いくらプロの先生とて、ありていに言えば「情が移る」というものであろう。

個人的には、こういった情景をみるたびに、なぜか救われた気分になる。例えば、もし医者であるならば、多くの死に出会うであろうし、そのひとつひとつに一々構ってなどいられないであろう。けれども、そういった立場にある彼らですら、その死がとても辛い患者が存在するという。

保育園の保育士さんなどは、まさに別離を繰り返すこ

とが生業のようなものである。けれども、そういった彼女らですら園児との別離に涙を流す。こういったことがあるからこそ、この国にはまだまだ良いところが一杯あると、そう思えるのである。

ただその一方で、カラッとしている園児達。こちらのほうは、どうなのか。でも、よくよく思い出してみれば、先生の転勤が悲しかったり、卒業が悲しかったりというのは、はっきりとしているのは中学以降なのではないだろうか。

それよりも前は、ある特定の人と離れ離れになるのが嫌だったというだけで、「別れ」そのものが悲しかったわけではない。よくよく考えてみれば、別れの辛さや悲しさというのは、もともとあったものではなく、後天的に学習するものなのである。

であればこそ、別れの辛さや悲しさというのは、年を追うごとに深くなるものなのであろう。

してみれば、今の自分の年よりも約20年経った後に伴侶を亡くした親父の心情は如何ばかりのものか。よくよく思い起こしてみれば、父に対しては強さばかりを求めていて、そんなことを考えたこともなかった。

いま一度、法事を終えた後の父の姿が目浮かぶ。だから、今度の父の日には、久しぶりに実家に帰ってみよう。そしてもう一度、父の背中を流してみようかとも思う。母によく似た目元を持つ娘を連れて。 (正)